虹猫の話　宮原晃一郎：作

(表紙)虹猫の話　宮原晃一郎：作

2①いつの頃か、あるところに一疋の猫がいました。この猫はあたりまえの猫とはちがった猫で、お伽の国から来たものでした。お伽の国の猫は毛色がまったく別でした。まずその鼻の色は菫の色をしています。それに目玉はあい、耳朶はうす青、前足はみどり、胴体は黄、うしろ足はオレンジで、尾は赤です。ですから、ちょうど、虹のように七色をしたふしぎな猫でした。

　その虹猫は、いろいろと、ふしぎな冒険をしました。次にお話するのはやっぱり、そのうちの一つです。

3　②ある日、七色の虹猫は日向ぼっこをしていました。すると、何だか、たいくつで仕方がなくなりました。というのは、近頃、お伽の国は天下太平で、何事もなかったからです。

「どうも、こういつも、あっけらかんとして遊んでばかりいては、体が悪くなっていけない。」と、猫は考えました。「どれ、一つ、そこいらに出かけて、冒険でもやろうか知ら。」

　そこで、猫は、戸口にはり札をしました。

「二三日、留守をしますから、郵便や小包が、もし留守中にきましたら、どうか、煙突の中に投げこんで置いて下さい。――郵便屋さんへ。」

4③それから、ちょっとした荷物をこしらえて、それを尻尾のさきにつっかけ、えっちゃら、おっちゃら、お伽の国境までやって来ました。すると、ちょうど、そこに雲がむくむくと起って来ました。

「どれ一つ、雲の人たちのところに、顔出ししてみようかな。」

　猫はひとりごとを言いながら、雲の土手をのぼり始めました。

5④雲の国に住まっている人たちは、たいへん愉快な人たちでした。仕事といっては、べつだん何にもしないのですが、それでも、怠けているからって、世の中が面白くないわけでもないのです。そして、みんな立派な雲の御殿に住まっていますが、御殿は地球から見える方よりも、見えない側がかえって大へん美しいのです。

6⑤雲の人たちは、ときどき、一緒に、真珠色の馬車をはしらせたり、又軽いボートにのって、帆をかけたりします。空の中に住まっているので、たった一人、恐いものは、雷様だけです。何しろ、雷様ときては、怒りっぽく、よく空をごろごろと、足をふみ鳴らして、雲の人たちの家を叩きまわるから無理もないわけです。

7　⑥雲の人たちは、七色の虹猫が訪ねてくれたのを大へんよろこんで、ていねいに挨拶しました。

「まあ、ちょうどいいところへおいでなすった。」と、雲の人たちは言いました。「じつは、風の神さんのおうちで、大きなお祝いがあるのですよ。それは、あそこの一番うえの息子の北の風さんが、今日、魔法の島の王様のお姫様をお嫁さんにお迎えなさるんです。」

　七色の虹猫は、こんなこともあろうかと、ちゃんと尻尾のさきの袋に、いろいろの品物を用意してきたのでした。

　ほんとに、びっくりするほどの立派な御婚礼だったのです。

　誰もかれも、みんなやって来ました。お客様のうちには、ほうきぼしも見えました。よっぽど立派な宴会でなければ、めったに出たことのないほうきぼしが見えたのです。

　又オーロラも、何とも言えない、美しい光りの服を着て出ました。むろん、花嫁の両親、魔法島の王とその真珠貝の妃とはそこに出席しました。

8⑦御馳走がでて、みんながにぎやかに、面白く喰べたり、飲んだりして、話しているまっ最中、そこへあたふたと飛びこんで来たのは燕でした。その話によると、大男の雷様が、えらい勢いで、こっちをさして走ってくる。なんでも、貿易風が大急ぎで通るとき、ひょっと、雷様の寝ていた足のさきに蹴つまずいたから、すっかり怒らしてしまったんだということでした。

「それはまぁ、どうしたらいいだろう。」と、誰もかれも青くなって、口々に言いました。「お祝いもめちゃめちゃに荒らされっちまうだろう。」

　そして、お客様も主人も、あわてて、ちりぢりに逃げ出しました。

　けれども、七色の虹猫は落ちつきはらっていました。この猫はなかなか智慧があったのです。

9⑧猫は、そっとひとり、テーブルの下にもぐりこみ、そのもって来た小さな袋を開けて、中のものをあらためながら、じっと考えておりました。

　が、間もなく、出て来ました。

「どうにか、私が雷様を来させないようにしてみましょう。」と、猫は申しました。「どうぞ、お祝いは、もとのとおり、つづけておやり下さい。私が参って、まあ一つ、何とかやってみましょうから。」

　みんなは、七色の虹猫の勇気があって、落ちついているのに、たいへん、びっくりしました。けれども、お祝いが途中で邪魔をされないだろうというので、よろこんで、そこに集まり、そのときには、もう遠くにはっきり聞える雷様のごろごろいう声をききながら、その方へ、ずんずん走って行く、七色の虹猫を見ていました。

10　⑨七色の虹猫は、走って行くと、もうはるか向うに大きな雷様の姿を見つけたのでそこに立ちどまって、袋を開け、中から一枚の大きなマントを引き出して、それを着、頭の上から、耳まで、すっぽりと頭巾をかぶり、そこに坐って何やら深い思案にふけっているようなふうをしました。

11⑩雷様は、このふしぎな姿をしたものが、天の道の中ほどにいるところまでくると、そこに立ち止まりました。

「おい。きさまは何者だ、又ここにいて何をしているんだ。」と、大きな声でどなりました。

「私かい。私は有名な魔術師ニヤンプウ子だ。」と、七色の虹猫は、いかめしい、もったいらしい、作り声で答えました。「私のこの袋を見なさい。この中に魔術の種がはいっているんだよ。雷さん、わたしは前から、あなたのことを、ちゃんと知っているんだよ。あなたはえらい有名な人なんだから。」

12⑪ 雷様はそう言われると、少し得意になりきげんを直しかけました。けれども、足をいためたので、まだ幾分怒っています。

「ふん、おれは魔術師なんてものを大してえらいとは思っちゃいない。お前いったい、何ができるのだ。」

「私はあなたの心の中が分るのだ。」

「ふふん、そうか。じゃ、今、おれは何を考えているのか、当ててみなさい」

「そんなことはわけはない。あなたは、自分の足をいためたことを怒って、あなたの底豆をけとばしたやつを掴えてやろうと思っているんじゃないか。」

　七色の虹猫は、前に燕から、ちゃんとそれを聞いて、知っていたのです。

　雷様はびっくりしました。

「うん、こいつは驚いた。お前、その術をおれに教えてくれないか。」

「それはむろん教えてあげよう。が、まず、見こみがあるかないか試験をしてからでないと、いけない。お坐んなさい。」

13⑫　雷様はそこに坐りました。七色の虹猫はそのまわりを三べん廻つて、何やら口の中でわけの分らぬことを、ぶつぶつ言いました。

「さあ、言ってごらん。私が今何を考えているか。」と、猫はききました。

　大男の雷様はぼんやりして、猫の顔を見上げていました。雷様はあんまり利口ではないのです。

「たぶん、おまいは、おれがここにぼんやり坐っているのは、馬鹿げていると思っているんだろう。」

「えらい。たまげた。それじゃ修業して物になる見こみは十分にある。私はまだ、こんな利口な弟子を取ったことがない。」

「じゃも一度やってみようか。」

　雷様は、自分が大へん利口だと思ったのです。

「よろしい。では、私は今何を考えているか当ててごらん。」

　雷様は、賢そうなふりをして、その小さな、馬鹿げた目で、ぼんやりと、虹猫の顔を見ました。

「ビフテキと玉葱。」と、雷様は突然言いました。

「これはえらい。」と、猫はわざと驚いたようにいって、尻もちをつきました。

「すっかり当った。どうしてそんなことが分るのだい。」

「いや、なにね、ふっと心に思いついただけさ。」と雷様は、言いました。

　猫はまじめくさって、

「あなたはその才をこれから育てあげて行かなけりゃならんぜ。すばらしいものだ。」

「どうして育てるんだ。」と、雷様はききました。人の心をよむということは、大へん愉快なものだと思ったのでした。

「なんでもないさ。」と、猫は、もうしめたと思ったので、いよいよ出たら目を言いました。「ウチへ行って、二三時間、寝ていなさい、それから、少しお菓子をたべて、又二三時間、寝るんだ。それから目がさめてからお茶を一ぱい、あつくして飲むんだよ。しかし、おとなしく、じっとしていないと、だめだよ。そうさえすれば、明日の朝、あなたはきっと人の心が、雑作なく読めるようになるから。」

14⑬ 雷様はすぐにもウチへ走って行きたいのでした。けれども、さすがに礼儀だけは忘れません。

「大きにありがとう。だがね、ニヤンプウ子先生、これを教えていただいたお礼には何を上げましょうか。」

　七色の虹猫はしばらく考へていましたが、

「私はちっとばかり、いなづまが欲しいから、ちょっぴりと下さい。」

　大男の雷様はポケットに手を入れて、

「お安いことだ。それならここに一たばあるから、これを持っておいで。用があるときには、その結んである紐を解けば、面白いようにいなづまが出るから。」

「どうも、ありがとう。」

　そう言って、七色の虹猫はいなづまを一たば貰い、二人はていねいに握手して別れました。

　大男の雷様は、大いそぎで、ウチへ帰ると、言いつけられたとおりにしました。それから後というものは、自分は、なんでも人の心を当てることができると信じています。おかげで、雷様はすっかり、おさまりかえって、もう誰にも、別だん害をしません。

15⑭　七色の虹猫は、いなづまの束をもって、すぐにお城へ帰って来ました。そこにいた人たちは猫がしてくれたことを、たいへんよろこんで、口々にお礼を言いました。虹猫もすっかり満足して、一週間、雲のお宮にいて、それから自分のお伽の国へ帰りました。そののち、何事が起ったかは、又この次にお話しましょう。

(おしまい)